

攝津濱崎神人と魚貝商業

永島 福太郎

一 濱崎神人の魚貝商業成立の前提

阪神地方は、奈良および京都の國都時代に、その門戸として開發され、そこに今日の繁榮の基が開けた。この地方には南都の社寺がまず墾田占定をはかつたが、墾田の莊園への成熟期には、藤原氏および京都社寺の割り込みがあつて、激しい爭奪戰も繰り返されたし、海岸・河岸に始まつた領有が奥地にも及び、國中余すところなく莊園の亂立となつた。しかも莊園は所職すなわち收益權の對象體とされたので、一定土地に於いて多種の所職が設定されたから、所職の領有者すなわち領主は多數となり、それぞれその領主權をもつた。

初め莊園は原則として田地の存在を以て設立された。畑地・原野・山河は、土地支配の對象とはならなかつた。そこは在家支配（人の支配）が行われており、莊園とは切り離されたものも、また莊園に附屬されるものもあつた。しかし漸次畑地原野の經濟價值があがり、田地に伍するものとなつてきた。莊園成熟期の莊園は、概ね在家支配を超克して土地支配を以て成立することとなつた。これには田畑耕地の比率が大きく影響をもつてゐる。⁽¹⁾なお田地をもたぬ隸屬民にしても、同じく莊民の列に加わつてくる。隸屬民たちは、その勞働力を領有されたものであるし、生業を山野河海に依存したものも多い。良民にしても、もちろんその勞働力が領有の對象とされてはいたが、二次的のものとなつ

てきた。

われわれは中世における土地の私的領有を等しく莊園と呼んでいるが、その時代差・地域差による莊園構造の差異を識別せねばならない。それは莊園において、在家支配・土地支配の比重差、所職の下地化の進行度に左右されるものである。もとよりその動向は土地支配の進展であり、莊園制における封建支配の發展となる。それにつれ莊園における所職は、必然的にそれに相當する下地の分割をうながし、土地の細分化となつてくる。

阪神地方における莊園の亂立は、さらに所職の分立となり、その領主權確立のために下地の分割が行われ、土地の細分化がうながされた。そこに開發もいつそう進むというものであつた。その實狀についてはすでに述べた。⁽³⁾加えて阪神地方は奈良・京都の最短距離の海岸線である。そのため交通運輸上の効用はもちろんのこと、さらに魚貝の供給地として重視された。したがつて貴族・社寺などは漁撈民を確保する要があつた。漁撈民にしてもその生業の安泰と身軀の安全とをはかつて貴族社寺に身を投じ、その隸屬民化した。漁撈は勞役であり昔は賤役とされた。しかも技巧を要するところから、その技巧を持つ解放民が再びこの隸屬民の主體となつた。いわゆる散所あるいは神人といわれるものがこれである。その多くは土地を持たぬし土地は與えられない。とくに田地においてである。しかし住居は小屋とはいえ設置されるし、菜園的畑地の開拓は進められる。ここに宅地・畑地が成立するが、なお在家支配の段階を出でない。しかしこのばあい、莊園領主の土地支配の對象化することにもなる。

一 一世紀末から一二世紀にかけて、攝津長渚庄の住人の支配をめぐつて東大寺と賀茂御祖社（下鴨社、略して鴨社）との間に紛擾が生じた。その經過については幾多の論述もあるし、土地支配と在家支配（人の支配）との二元的支配の實相に及んでの論究も見られるに至つた。⁽⁴⁾このばあい、莊園領主は東大寺であつて、必然的に在家領主を壓倒し、土地支配の中に在家を埋没してしまふべきではあつた。しかしこの在家領主が名だたる鴨社であつたから、土地支配の強化をはかる東大寺との相論が、はてしなく繰返されたわけであるし、訴訟に對する朝廷の裁決も、それぞれの用い

るところとはならなかつた。もとより長渚庄は、天平勝寶八年（七五六）の勅施入にかかる東大寺の根本所領であつたが、墾田施入のこととて一色莊園化にはなお時を要した。その間、人を對象とする公事の催徴權はなお朝廷に遺つていたし、官府の支配權はなおこれに及んだ。この公事催徴權はやがて小一條院敦明親王以下に傳領されるに至つたが、東大寺の關與すべきものではなかつた。しかしたまたま長渚庄の住民は漁撈に従事していた。その庄民の漁撈も東大寺が確保し得たはずであるが、東大寺の勢威はこのころ沈滞していたし、もちろん親王家の權威も地におちていた。そこで漁民はさらに有力な權門に頼る必要から二條關白家（藤原敦通）に身を投じてその雜色となり、その散所として官府の公事を免れ、漁撈權の確保をはかつた（庄民の全てが散所となつたのではない、そのうちの漁民と解したい）。かくて二條關白家から皇太后（藤原歡子、敦通の女）職家に讓與され、歡子を本願とする常壽院に寄進された。しかしそのころ鴨社の切望によつて、應徳元年（一〇八四）に山城小栗栖郷との交換が行われ、鴨社領長渚御厨の成立となつた。長渚庄の漁民が鴨社の供祭人となつたのであり、長渚御厨はこの供祭人を以てかく稱えられたものであつて、その敷地は長渚庄であり、東大寺領である。このばあい、この供祭人達の宅地はあり、耕地も幾分は備わり在家化していたらう。やがて東大寺はこの在家の土地を基礎として、一方では供祭人である庄民に公事を要求した。そこで在家役を鴨社に上納していた庄民は二重負擔となるし、鴨社の抗議となつたわけである。これには東大寺がその土地支配の強化に乗り出して、鴨社の排除をくだてたと解せられるし、鴨社側では供祭人の支配すなわち在家支配によつて、いぜん宅地および耕地はそれに附隨するものとしてそこでの土地支配の強化をはかつたため、東大寺の忌諱にふれたとも解せられる。鴨社の土地支配の強化とは鴨社領莊園の設立（立莊）ということになる。

かかるばあい、公家の裁決にしてその抜本的なものを求めるとすれば、鴨社御厨を廢絶せしめるか、あるいは下地を分割して東大寺領長渚庄と鴨社領長渚庄（御厨と稱しても可）との分立がはからるべきである。しかしようやくその勢力をもち返してきた東大寺は、その分割を頑じるものではなかつただらうし、鴨社にしてもここから神社の必需品

たる魚貝を得るのであるから、その放棄は不可能である。公家では兩者の既定事實を基として、土地は東大寺、在家
 Ⅱ人は鴨社の支配という裁決を繰り返すのみであつた。これに對し東大寺は、勅施入の寺領に他の領主權が設定され
 たのは無効であるとしてなお抗論した。官府の公事催徴權はすでに弱退化してしまつた時代のこととて、この主張は
 是認される。しかし公事催徴權がすでに具體化し、それが轉々として鴨社の在家支配となつたものであるし、むしろ
 住民がその漁撈權確保のために身を攝關家に投じ、それが鴨社の在家支配を成立せしめたものであるから、法的根據
 においても、現實問題としても、鴨社の主張は正しい。そこで長渚庄における二元的支配はなお續けられたし、その
 紛擾も終息しなかつたため、史上を賑わすことにもなつたのである。いつしか土地を得て鴨社領長渚御厨が設立され、
 一五・六世紀までは存続したようである。⁽⁷⁾ところでこの住民が進んで身を權門社寺に投じたことは、もとより土地寄
 進のばあいも同様であつて、莊園設立の要因をなすものであつた。また在家支配において、藤原教通のその女歡子へ
 の讓與が見られるが、事情によつては子女數名へ分割讓與してもよい。また歡子の菩提を弔うため常壽院に寄進され
 たというが、さきの讓與といいこの寄進といい、その得分(收益)の讓與寄進であつて、住民の身はなお攝關家の散所
 の雜色であつて、領有權はいぜん攝關家にあつたものと見られる。⁽⁸⁾このため住民もなお攝關家領たることに甘んじた
 ろうし、東大寺にしてもあえて聲を大にはなし得なかつたものかとも思われる。ともかく鴨社領とはなつたが、それ
 は供祭人(供御人)として漁獲物の一部を鴨社に上納するもので、また攝關家領散所、ないし長渚庄へ數多の領主權
 が及んだ。これはいづれ下地の分割領有へと進むものであつた。そのうえ武家の地頭職設置もこれにさらに所職が加
 わることであるし、これはいづれ住民にして人身土地ともに武家に投ずるものでもあつたから、そこで下地分割がい
 つそう激しくなつた。

莊園は收益權の對象であるから、その亂立といひ所職の分化といつても、必ずしも生活村落の分立をもたらずもの
 ではない。しかし下地の分割に至ると、しぜん村落の分立をもたらずあひが多くなるのである。この點、圖式的に

村落のぞく出ということはできないが、村落の分立と土地の開拓および細分化とをうながしたものとはいえよう。のち尼崎となる長渚庄にしても、猪名庄の河濱二五〇町が分割したものであり、それが開發されて東大寺領長渚庄のうちに遂には鴨社領長渚御厨を生んだし、また猪名庄の一部は興福寺領猪名庄となるし、そこに神崎が生まれてくる。河邊・海邊の開發までここに進むというわけである。

註(1) 拙著「中世の民衆と文化」(創元社・一九五六) 一三〇頁。

(2) 拙稿「在家の分解」(國史學六六號・一九五六) 二〇頁。

(3) 拙稿「中世阪神地方の發達」(關西學院史學二號・一九五三)。

(4) 小嶋鉦作「莊園における複合的領有關係の研究」(政治經濟論叢二の四・一九五二)。供祭人は供祭人と書くのが正しいが、鴨社では供祭人と慣用している。

(5) 内閣文庫所藏「攝津國古文書」。嘉承元・五・二九官宣旨。刊本の大日本古文書東大寺文書五および平安遺文にも見える。

(6・7) 小野晃詞所藏文書(關西學院史學二號七八頁參看)。なお長渚御厨は「尼崎と號す」と見える。

(8) 近衛家領目錄。その主殿所の支配に屬した(次章參看)。

(9) 東大院文書(大日本古文書所收、三の六四九號)。

二 興福寺領濱崎庄と濱崎神人

前おきが長文に墮したが、ここで主題の濱崎神人をとりあげる。濱崎神人は春日黃衣神人であつて、その若宮神主の支配下にあつた。春日若宮の神饌たる供菜すなわち魚貝の漁撈賣買を事とするものであつて、長渚庄の鴨社供祭人と同類である。濱崎神人の住居地は濱崎庄であるが、この濱崎庄は春日社と一體化していた興福寺の根本所領であつて、この點、東大寺領長渚庄における鴨社供祭人のばあいと相違がある。さらに春日社興福寺は、藤原氏とまた一體化していたから、攝津國をその知行國化していた藤原氏からの保護を現地においてもうけることができたため、濱崎

神人としてはあえて權門社寺に身を寄せる必要はなかつた。長渚庄民は檢非違使廳役の催徴を免れようとして二條關白家に身を投じてその散所となつたというが、かような官府の公事も濱崎神人にはかからなかつたわけである。官府とはいえ、これ亦藤原氏の構成するところであつたからである。春日社興福寺領であつたことは、本所が藤原氏、領家が春日社興福寺という領有關係であるが、實際は藤原氏の本所權は興福寺に委ねられる例であつた。濱崎庄および濱崎神人は春日社興福寺の一色所領および領民としてその權威を誇ることができたのである。濱崎神人においては、春日供榮貢進の黃衣神人であつたことから、興福寺領庄民としての公事は免除されていたものである。

ところで濱崎神人が黃衣神人であることはとくに注目させられる。春日神人は大別して黃衣神人と白人神人となる。黃衣神人は本社にあつて神事に奉仕するものであり、白人神人は社寺領内に散在してあるいは莊官となつて末社を祭祀したり、あるいは商工業に従事したものである。したがつて濱崎神人もこの白人神人であらねばならないが、黃衣神人である。ところで濱崎神人がなぜ黃衣神人であつたかといふことは明かでない。この黃衣神人といふことから、濱崎庄民（もちろんその一部が）が散所的性格にあつたらしいが、これも確かなには論ぜられない。ここでは本社神人に准ぜられるほどに重用され、それゆゑに強く隸屬させられていたと説くのはおかしいし、とくに本庄成立以來の隸屬民にして、漁業を事としたものと説くべきであらう。

海に遠い奈良の春日社としては、供榮の魚貝の供給は攝津の社寺領にこれを求めねばならなかつた。京都における神社と同様である。京都では一方、これを江州湖岸にこれを求めたが、奈良春日社でも和泉海岸からこれを得た。堀近在の魚貝賣買の輩が春日供榮備進神人であつた例證も檢出できる。⁽¹⁾ともかく神社の必需とする魚貝備進の輩であつたために、これに神人たる身分が與えられたものである。

春日社濱崎神人の成立は、興福寺領濱崎庄が仁壽年中（八五一）に施入（藤原氏からと思われる）されたさいの成立とされる（後述）。濱崎庄は興福寺の根本寺領として別當領である。興福寺十二大會の料所であり、攝津國では吹田・河南・

新屋・味舌・澤良宜・猪名・溝杭の諸庄と列を同じくしており、おそくとも平安中期を下るものではないと思われるから、ここにいう仁壽年中は正しかろう。濱崎神人は濱崎庄民にして漁撈の輩がとくに身を春日社に投じて漁撈權の安全をはかつたものであり、春日社において若宮社が保延二年（一一三六）に創建されたので、これに屬することになったし、若宮神主の支配下に入つたものであらう。

濱崎神人にしても、かの鴨社供祭人にしても、その所屬する神社に魚貝を進獻するか、と同時にその販賣を認められ、その商圏の安全を保證されたものである。いわゆる座業である。ここで濱崎神人が商權の獲得を仁壽年中とすることは、この神人等の主張であつてその傍證はない。座商人がその起源を平安朝の昔といい、その主張を立證するために僞文書の作製をなすことも稀ではない。濱崎神人の成立は平安中期にはさかのぼれるかも知れぬが、商賣に轉ずるのは、平安末期あるいは鎌倉初期であつたらう。鴨社供祭人としても、既述の時期ではなお商人化は見られなかつたとしてよからう。濱崎庄民たる漁民の、かつは春日神人として、かつは商人としての成立は、鎌倉初期とするのが妥當であらう。もとよりこれは商人の輩出があつたために、權門社寺の權威をかうとしたものであつて、前代において國司官使の呵責を逃れようとして身を權門社寺に投じたものとは別個に論ぜられねばならない。濱崎神人のばあいは、繰り返しいうことになるが、鎌倉初期に春日社の方では供菜神人の確保のために、濱崎庄民の方では商人として發展のために神人に列したものであつたらう。このことは、鎌倉初期において莊園の動搖を食いとめようとした寺社本所の應急策でもあるし、一方、商工業の發達してきたことを如實に示すものである。

濱崎神人の成立は、他の漁撈民あるいは商人との競争のためであつたから、絶えず商圏の保持に注意せねばならなかつたし、侵害されたばあいにはその領主たる春日社に訴えてその停止をはかることもあつた。春日社では藤原氏に訴え出るし、實力行使となれば興福寺僧兵の動員もできた。いまその商權が侵犯された一例として弘安三年（一二八〇）のばあいがまずあげられる。濱崎庄および濱崎神人の文獻としては古いものである。その侵犯に堪えきれなくな

つた濱崎神人はこれを本社に訴え出た。

攝津國濱崎御庄供祭神人等雜掌謹言上(卷)

欲早任先例、致生魚賣買業、嚴重供祭更不可令闕如由、被申下 長者宣子細事

右去仁壽年中之比、被奉施入件濱崎御庄於興福寺領之後、彼庄住人等、令補任春日御社散在之神人之職、致生魚賣買之業、以件上分令備進當社嚴重供祭、已雖送數百餘廻之年序、敢無他妨、爰近代募諸權門之威、賣買輩雖有之、濱崎神人等存穩便之儀不及籌申、而剩近年動不知案内輩等、令擬退轉于當社供祭人賣買、此條未曾有次第也、若雖爲向後、依奸謀之輩無道濫妨於彼業、於有致違亂之族者、嚴重供祭闕如之條不可待言、社家御大訴何事如之哉、然者早御意政御時、被經御沙汰、於彼賣買者、永不可有他妨之由、欲被申下 長者宣、仍粗言上如件、

弘安三年五月 日

攝津國濱崎供祭神人等雜掌

濱崎神人の魚貝商賣が他の新規商人等のために著るしく侵害されているので、この邊でその特權を明かにして、他の所からの商賣を防遏せねば禍根となるといふのである。もとより春日若宮神主も同感するところであつたから、春日社家全員にはかつて、春日社家全員の愁狀を藤原氏(氏長者)に上申した。

春日社司等謹解 申請 長者殿下政所裁事

請殊蒙 恩裁、任濱崎庄供祭神人等雜掌解狀旨、被成下 長者宣、全所捧上分子細狀

副進

一通雜掌解、

右子細、委見于供祭神人等雜掌解狀、凡當庄神人致生魚賣買之業、以件上分備進當社其來尙矣、誠是嚴重神供也、爭可有濫妨之義哉、若猶爲新儀張行之輩、於被致賣買之妨者、恒例貢進之上分可令闕忌之條、頗神威隔薄之基也、望請 恩裁、且供祭不失先例、人止新儀之濫妨、上分備進可無退轉之由、被成下 長者宣、欲備于未代龜鏡、仍勒事狀、以解、

弘安三年五月 日

神宮預從五位下中臣連 祐親

此通暑社解依不同、神主方別紙ニ書之畢、但社解ハ只同事也、神主方通暑ハ正權神主二人許也、

弘安三年五月 日

權神主從五位下大中臣朝臣彥繼
神主從四位上大中臣朝臣經世

この春日社家の訴訟を受理した氏長者の處置は明かでないが、興福寺別當一乘院門跡に對して濱崎神人の特權を保護すべきことを命令したものらしい。かくて興福寺別當から次ぎのような政所下文が發せられた。

攝津國濱崎神人生魚賣買事、不可有他所妨之由 寺家〔僧略〕一乘院 御下文〔案文〕、

興福寺公文所下 攝津國濱崎庄庄官・百姓等

可早任先例、致賣買等沙汰生魚事

右當庄住人春日神人等訴中生魚賣買事、任先例可致其沙汰、更又不可有他所妨狀、依 政所仰下知如件、以下、

弘安三年七月廿三日

知 事法師

權專當法師在判

〔行覽〕
寺主法橋上人位在判

大知事法師

藤原氏があえて長者宣、あるいはとくに綸旨・院宣の類を請うてこれを下令しなかつたのは、なお興福寺領民としてその特權を有していることを示すだけで、濱崎神人の商權保護は十分できると考えたからである。攝津海岸線はほとんど興福寺が領していた。渡邊・神崎から武庫・山道・魚崎に至るまで興福寺領である。その間に東大寺領猪名・長渚兩庄のほか京都社寺の所領が若干あるが、興福寺領は絶對多數に及んでゐる。藤原氏の勢力を背景ともするし、現地での興福寺勢力はなお大であつた。この興福寺別當の免許狀を示すことで、十分に他領商人を屈服せしめることができるゝ期待された時代のことであつた。

しかし、いつまでもかような特權は維持さるべきものではなかつた。この濱崎神人の訴訟はなおつづけられた（後説）し、また一方では政治社會事情の進展もあるからである。というのは、他所商人の侵害というが、この他所商人にしても、その領主をもつし、それを本所としてその商權を得ていたものである。その領主はとうぜん公家方であるし、藤原氏とも關係がないとも限らない。いったん紛擾がおきると、公家はその裁決に苦しむのである。なお紛擾の原因には、魚貝の需要が高まつたために魚貝商人の活動が活發となり、封鎖的特權商業もその需要の前に打破されつつあつたと見るべきである。それゆゑ政治權力にしても、よほどの強さがなければ紛擾の裁決などできるものではない。ところで當時の政治權力は、公家はもちろん、これを壓倒した武家にしてもようやく沈衰の兆があつたのである。はたして、そののち南北朝動亂時代が訪れると、濱崎神人の特權が侵害された。

貞和元年（一二四五）に至つて濱崎神人と廣田社神官供僧等との間に刃傷相論事件が出現した。事件の發端は神崎庄の魚貝商人の右近太郎と福田三郎というものが、西宮へ商賣に來たところ、廣田社神人三郎太郎等よりその商賣の場錢を要求されたので、亂暴を働らき、却つて廣田社神人らに打擲された（この廣田社西宮神人は散所民である）。この神崎の魚貝商人等は、濱崎神人かあるいはその配下であつたらしく、この訴によつて春日若宮神主千鳥祐任が興福寺に申告し、興福寺から公家へと上訴するに至つたものである。かくて尋問の院宣が廣田社を所領する白川伯家に下された。

しかし、事態はすでに變化してしまつていた。ここでもいまいちど弘安三年の相論をかえりみるが、既述のような興福寺別當の制札ぐらいで、濱崎神人の商權が保護されるというわけには行かなくなつたようである。弘安八年九月には、つぎのような長者宣が若宮神主に與えられている。

濱崎神人與大番舍人主殿所并鴨社供祭人相論生魚交易事、兩方訴陳狀并問注記被經御覽了、濱崎庄爲興福寺領、住民爲若宮神人備進供榮之條不背理、被逐日來之沙汰、不可有相違之由、別當^{中御門爲方}左中辨殿御奉行候也、仍執達如件、

弘安八年九月廿六日

左衛門尉光廣

謹上 春日若宮神主殿

いぜんとして生魚賣買權をめぐる現地の紛擾がつづいていたことが示される。またこの長者宣により、紛擾中の生魚商人が濱崎神人と鴨社長渚供祭人であることが明かにされるし、長渚供祭人が攝關家大番舍人主殿所の供御人をかねていたこともわかる。いぜん攝關家の雜色たる身分も兼ねそなえていたのである。現在の尼崎市の地域内で、攝關家・東大寺・興福寺春日社・鴨社等の有力社寺の權益をめぐる紛擾が種々のかたちで展開されていたことが知れよう。この裁決に當る公家、その中心たる藤原氏自身もまたその權益を持つていたのであり、しかも問題は漁民あるいは魚商人が漁民から生魚を買取つて領主に納入するのではなく、生魚商業がすでに展開しているのであるから、簡単に解決するはずのなかつたことがこれででも知れよう。この事情があつた上に、南北朝動亂がおとずれたのである。公家・武家ともにあまり頼りにならぬとしたら、商人たちは實力で商權をまもるほかはない。しかも殺伐な時潮にあつたのだから、貞和の事件が刃傷事件に及んでしまつたというわけである。もちろんそれでも、公家に訴え出し、公家でも裁決にあたつたのである。濱崎神人を刃傷した廣田社西宮神人の領主伯家に下された院宣はつぎのようである。なおこれは二回目のものである。

院宣案

攝津國濱崎庄資衣神人申訴事、若宮神主祐任申狀^{副具}、如此、子細見申狀候歟、先度被仰候畢、何様事候哉之由、院御氣色所候也、仍上啓如件、

貞和二年四月廿五日

〔万里小路〕
左少辨仲房

謹上 伯二位殿

これより先、前年十二月廿四日に院宣が白川伯（資繼王）家に下されているのである。その尋問によつて廣田社祠官供僧等は、濱崎神人はすでに守護方に訴訟したが、事實無根の訴として棄却されたため、ここに院宣を申し下したものであると抗辯した。このため興福寺側が重ねて上訴したために、右の院宣が伯家に再び下されたものである。ところが、この院宣に對して廣田社側の陳辯がなかつたので、興福寺側では再度若宮神主の上訴を公家に舉申した。

御寺務御擧狀案
當社四季供榮備進攝津國濱崎庄資衣神人訴聞事、

若宮神主祐任狀^{副具}書等、如此、子細見狀候歟、以此旨可令申沙汰給之由所候也、恐々

謹言、

貞和二

五月廿九日

法印覺懷

〔仲房〕
謹上 左少辨殿

ここに御寺務とあるのは興福寺別當、すなわち一乘院覺實であり、覺懷はその出世奉行、すなわち秘書官長に當る西南院法印である。これにもとづき、六月一日に重ねて院宣が伯二位資繼王に下された。それでもなお廣田社側が答えなかつたので、六月廿六日に興福寺別當から再三舉申があつた。さきの六月一日付の院宣は、同十七日に廣田社に送られてきたので、同廿七日に廣田社祠官等が陳辯狀を左少辨仲房の許に持參した。ところが仲房の家人が、さきの四月廿五日付の院宣に對する陳辯がなかつたということを理由として陳辯狀を受付けぬということになった。ようやく七月十六日に至つて、廣田社の陳辯狀が伯二位家を経て公家に進達され、これが同廿六日に興福寺に送られてい

る。このさい伯家では廣田社側には全く違犯の事實のないことを副申している。

この相論の結末はつかなくつたようである。武家も當時は足利尊氏の時代とはなつてゐるが、南北朝抗爭期であるし、公家・武家いづれもかかる小事件にかかづらつてゐるわけにもいかなかつたことでもあつた。しかも春日社興福寺といい、廣田社といい、公家にしてはいづれにも左袒することはできなかった。當事者はやや興福寺側に立つた感もあるが、伯家・廣田社という有力な公家の羽翼を放擲することもできなかったのである。興福寺側にしても、事の真相は十分には分らなかつたようであるし、この程度の事件は累發しておる。そのうへ、一乘院・大乘院の兩門跡が南北朝の抗爭にまきこまれ、黨争を繰返してゐた時期であつたから、現地の調査も十分にはしなかつたし、全力をあげて公家武家に無理強いをすることもできなかったというわけである。

たまたま同年十月に、廣田社祠官供僧等からの詳細な陳辯狀が提出されている。そこでもなお相論の解決が見られなかつたようである。この陳辯狀から、この事件の経過がいつそう明かに知れるし、すでに當時の公武權力では解決など期待できぬものとなつてゐた。

(註) (1) 春日神社文書第三の二二。建武四・六・一一に足利尊氏は市庄神人らの堺浦供菜賣買の禁を解いている。

(2) 大乘院尊尊筆「興福寺年中行事」

(3)・(4) 春日若宮神主中臣祐賢記弘安三・五・一五日條

(5) 同右、弘安三・七・二三日條

(6) 春日若宮神主祐春記弘安八・九・二七日條。本書の原本は現存していない。わずかに江戸時代の書き抜きが豊中市今西家に現存しているところから、これを掲記することができた。濱崎神人と長渚供祭人との關係を知る唯一の史料である。

(7) これらの貞和相論に關する史料は、内閣文庫所藏の「廣田社舊記」である。この書物は實は興福寺に所藏されていた「御教書并御舉狀等執筆引付」の類の一部である。東大史料編纂所影寫本を西宮市廣田神社において再影寫し、それが「兵庫縣神社誌」廣田神社の項に收録刊行されている。その刊本はほぼ完全に近い鰻刻である。ここにあって全文書を收録しなかつた所以である。

三 濱崎神人の自立と阪神地方の發達

貞和二年十月の廣田社の陳辯狀によつても、濱崎神人等の謀訴であるということを主張しているし、同社としても自分達に違犯事實はないとしているのであつて、この事件の解決は見出せるものではなかつた。

廣田社側の主張によると、西宮に立ち入る魚貝商人等は、いかなる權門勢家の領民といえども、一人一荷三錢の上分を廣田社家に納める例だといつてゐる。しかも濱崎神人である神崎魚商人等は、廣田社領の供菜釣船から魚貝や小鯛などを買請けてこれを振賣していたものであるともいう。しかも武家の守護方の家來だといつて、その權威をかさにきて廣田社への上分(税)を納めなかつたため、上分をとろうとする廣田社神人との間に喧嘩がおこり、神崎商人等が腰刀を抜いたので廣田神人等は逃げ隠れさせしたが、それを神崎商人等は逆に廣田社神人等が刃傷したと謀訴したといふのであつた。

當時の武家では、足利尊氏のもとで攝津守護には赤松美作權守範資が任ぜられていたし、現地には守護代河江右衛門太郎入道圓道があつた。かの濱崎神人はすでに守護方に款を通じていたようである。この河江入道も現地調停に乗り出し、西宮で檢證や對決をおこなつたようではあるが、廣田社側の主張は意外に強く、濱崎神人にしてもその論據も薄弱であつたため、解決までにはいかなかつたものである。しかも足利氏初政時代はなお武家權力は弱く、事なかれ主義の時代であつたという關係もあつた。この事件はかくて時の進展による解決をまたねばならなくなつたわけである。

西宮は周知のように廣田社の西宮夷社の所在地として發達して來たものであり、中世では廣田社を白川伯家が管領することになつたので、西宮一帯は伯家領となつた。この廣田社神領という關係から、西宮へは春日社興福寺をはじ

め、南都社寺もその所領を設定することはできなかった。もちろん西宮の海上權も廣田社が握っていたものである。西宮は鎌倉末期には相當な集落をなし、商業もおこつたし、とくに阪神の沿岸漁業の集散市場となつていたものと見られる。⁽²⁾その商業の股賑に關連して西宮夷社の信仰もさかんとなつたらしい。これは前掲の廣田社神人と神崎商人との喧嘩において、廣田社側に落ち度のなかつたことの證として、「此條、都鄙參詣人等群集之間、社家無其隱」との主張において、參詣人の群集といつてゐることも知れよう。⁽³⁾かの喧嘩も夷社の祭日に市も立ち、そこに近隣の商人が入り込んださいにおこつたものとも見られる。西宮の魚市とでも考えてもよからう。ところで商取引あるいは市場營業等においては、しぜんなお幼稚ではあるが慣習的な商法が見られてくるし、平和的商取引ということも大衆の要望から生じてくる。それには人力以上の神佛の冥力がかられるのが中世の例であつた。かようなわけで西宮夷社門前町が繁榮してくるのである。またこの理由から、濱崎神人を後援した武家の守護方にしても、理不盡にここへ武力干渉もできなかったというわけである。西宮の廣田社側から、將來は神崎商人とよく協議するから、この紛擾のことは手を引いて欲しいと申込みを受けた守護代河江入道にしても、これを容認するよりほかはなかつたという事實もある。⁽⁴⁾廣田社あるいは西宮社の神威もさることながら、商人、むしろ商人を必要とするまでに至つた大衆の要望が、公家・武家の支配權力の一方的行使を阻止するに至つたと考えねばならない。

ところで濱崎庄は興福寺領であり、その住民のうちに春日若宮神人があり、それが漁民であつた。濱崎庄の位置についての確證はなく、なお近世では濱崎の地名は失われてしまつた。しかしこの貞和の相論から、濱崎神人はほぼ神崎商人というに等しいことが分るので、神崎に境を接していたところと見ていい。⁽⁵⁾しかも長渚庄とあまり離れておらずぬことはその紛擾からも知られる。したがつて濱崎庄は近世において濱村といわれたあたり、現在の省線尼崎驛近邊に比定してよからう。猪名・長渚・神崎・新屋・濱崎の尼崎地域から西宮にかけての沿岸は、中世では有力な漁場であつたともいえよう。濱崎神人に對する鴨社長渚供祭人たる神人は、その數は三百人、間人二百人と元永元年(一一一八)

にいわれ、その漁民數がここに示されるし、在家數千軒に及ぶとさえいわれている。⁽⁶⁾かなり誇張もあるが後世の尼崎もかかる漁村から發展したことが知れよう。しかも「敢無地利益」の海邊湖濱から發達したものである。⁽⁷⁾

さて、この貞和の相論を通じて、われわれは濱崎神人の動向について注目させられるものがある。それは濱崎神人の自主的活動が顯著になつたことであり、自立化が進んだということである。守護方百姓とも自稱し、守護方に款を通じていることは、武家勢力が増大し、武家が壓迫してその被管化をはかつた結果ともいえるが、むしろ濱崎神人が進んで武家の權力を迎え、社寺の權力とあわせてその活動の後盾としようとしたものと見られる。したがつて、廣田社側ではすでに濱崎神人といわず、神崎商人といつてゐる。濱崎神人の配下として神崎商人があつたとも見られるが、これは同じといふべきであらう。さらに商人といつておるところにも、それらの自立化を見るべきであらう。

武家は寺社本所の領する商人等の奪取をはかつたというが、むしろ商人等が進んでこれに投じたといふべきであらう。このことは、莊園のばあいでも同様である。ともども濱崎庄といひ濱崎神人といひ、春日社興福寺領からの脱却も時期の問題となつてきた。その脱却の一手段として武家の權力をも迎えたのであつて、これを武家の侵害とのみはいへなからう。

濱崎庄のばあい、應永三十三年(一四二六)にはなお興福寺領として殘存していたようであるが、永享三年(一四三一)には有名無實となつたらしいし、康正二年(一四五六)でははつきりと不知行といわれるほどであつた。猪名・溝杭兩庄などよりは不知行化が早い。⁽⁸⁾したがつて應仁の亂(一四六八)ともなると、もはや起死回生のすべも全くなつた。⁽⁹⁾濱崎神人についてのその後の動向は全く不明である。推測すれば、春日黄衣神人の稱號は、その商圏の擴張といひ、その保身のためといひ、自ら誇示していたかも知れないが、本社との關係は絶えたものと考えてよからう。すなわち濱崎商人の自立である。それがまた武家の被管になつたとしてもそれは昔日の隸屬民としてではない。莊園領主の社寺側にしても、かつては魚貝必需のために、供養神人を確保せねばならなかつたが、商品流通が活發化したため

に、あながち温存する必要もなくなつたということも考えられる。かの弘安三年（一二八〇）の第一次事件のあとの同六年のことであるが、濱崎神人からの魚貝進納がなかつた。そこで九月には、濱崎庄定使の春員がその責任をとり、奈良の市で魚貝を買求めて春日若宮に納入している。⁽¹⁰⁾このことは奈良で魚貝が必要とあらば買求めることもできたということを示す。しかも當代では土地支配の方に重點がおかれるし、現物上納よりか金納を欲することにもなつた。他に重大事件や事情もあつたとはいへ、貞和の西宮との相論に、春日社興福寺が積極的に濱崎神人の訴訟の達成をほからなかつたということも、こんなところにその理由があつたのであろう。これは恐らく鴨社領長渚御厨についてもいえることであらう。⁽¹¹⁾神社などで毎日缺くことのできなかつた魚貝などは、一面ではすでに恒常的上納も期待できないという事情もあつて、その入手方法の切換えが行われたものと見てよい。これには京都・奈良のような都市の市場には、すでに全國からの物資が搬入されていたことが關係したものと見えよう。もとより、都市民の需要が増大したということでもある。しよせん、供養神人などの確保や温存は、商品流通の未熟時代の所産といえようし、商品流通の活發化とともにその重要性は減ずるに至つたものといえよう。

濱崎神人の魚貝商業は、まさしく中世の座商業の一であり、この神人が魚貝座を組織していたものと考えてよい。魚貝の商品化とともにその座は組織されたものであろうし、それは鎌倉時代に至つてからであらう。おぼろげながら、濱崎神人は、長渚あるいは廣田社領漁民から、その漁獲物を求めて、これを販賣していたことも知れる。そして南北朝時代以後には、たとえ本所は有していたとしても、かなり自主的な商人の座に變質したものとも考えられる。もとよりこれには濱崎の位置が阪神地帯だつたという關係もある。濱崎神人の魚貝座が自主化商人の座となつた室町時代に、如何なる道程をたどつたかについてはいまのところ知るすべもない。おおむねいえることは、阪神地帯の漁業は、阪神地帯の發達からその消費が増大し、これに供給するだけのものになつたものであろう。規模はなお漸大をたどつたものと考えられる。⁽¹²⁾このことには、なお漁獲の品種がいかなるものであつたかを考える必要もあるし、漁

場の遠海化や漁民・魚商の職業轉向なども考えなければならない。また隸屬民の解放にも關係があらう。われわれは、長渚供祭人とともにこの濱崎神人の魚貝商業活動を知ることができる。土地利益よりも、むしろ海邊なるが故に、港灣として、漁撈地としておこつた阪神地方發達の一面もここに見れるというものである。とくに西宮・尼崎地域の發達がここに若干ながら明かとならう。

註(1・3・4) 廣田社舊記

(2) ここで西宮という地名がでてくるし、かなりその發達した狀を示している。西宮町史料としては五指を屈するほどの古さをもつものである。

(5) 廣田社舊記所收の貞和二年十月(廣田社神官供僧等)の陳狀に「依爲國狼藉、濱崎兩庄神人等先就訴申守護方」と兩庄とあるところから、神崎・濱崎兩庄と見た。同一箇所にして、領主を異にするばあいなど、その地の呼び名を異にする例もあるが、ここではしばらく近接の別庄としておく。

(6) 東南院文書(大日本古文書所收三ノ六四九號)

(8) 大乘院寺社雜事記康正二年十一月別帖(刊本第一卷六六頁)

(9・11) 關西學院史學第二號所掲攝津莊園史料參看。

(10) 春日若宮神主中臣祐春記弘安六・九・八日條

(12) 阪神漁業は、ぜんじ衰退ということが考えられるが、鰯・あちなどの漁獲が、現在西宮市で一八〇〇萬圓にも達しているから、あながち衰退とのみはいえなからう

〔附記〕 本稿は昭和二九・三一兩年度文部省科學研究成果刊行費による「春日社記錄」一・二卷の刊行にさいしての調査研究であるし、また西宮市史の史料となすものである。